

2019.4

春夏

No.108

思文閣出版

鴨東通信



◆ 日常語のなかの歴史 21
そそう【粗相／麁相】

◆ 朴珉廷

◆ てーたいむ

絵画史料でよみがえる琉球王国

◆ 豊見山和行 ◆ 藤田励夫 ◆ 外間政明

共同研究「植民地帝国日本における
知と権力」を終えて

◆ 松田利彦

彷徨わない幽霊

◆ 小山聡子

エッセイ
五条坂の地域史と研究の隙間

◆ 木立雅朗

井戸から考える
天神さんの神仏習合

◆ 佐々木創

◆ リレー連載(2) 先読み！二〇三〇年の人文科学
「知の世界」への入り口をつくる ◆ 丸川雄三

◆ 史料探訪 69

豊臣秀吉を支えた小出秀政

◆ 大澤研一

——直轄地支配の担い手——

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究

2月刊行

B4判上製・一八四頁／本体 一八、五〇〇円

第二尚氏時代から明治時代前期（18～19世紀）にかけての、琉球の船と首里・那覇の景観を描いた絵画史料集成。大判カラー図版65点掲載。

収録図版には、最新の研究成果により解説を加えるほか、琉球史や対外交流史研究に携わる執筆者による10本の論考を収録。琉球史研究の基礎的史料集。

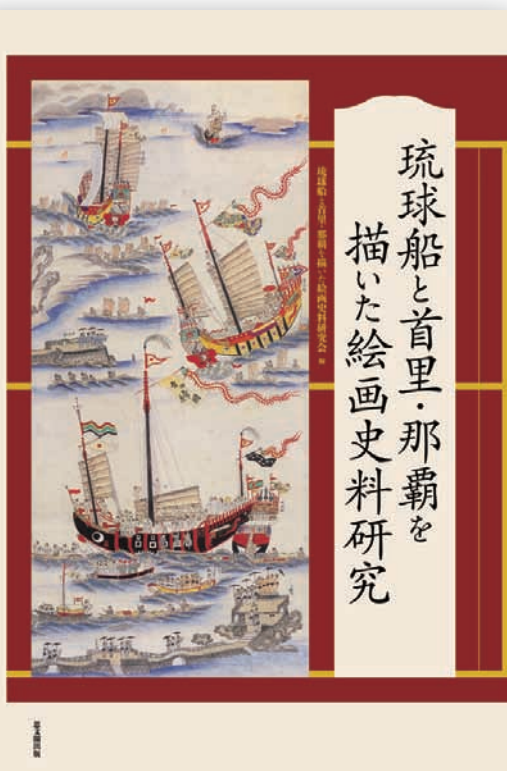
【図版】

- 一 琉球船
 - 二 首里・那覇
 - 三 首里城
 - 四 那覇港
 - 五 薩摩
 - 六 中国
- 参考文献
収録史料落款覧

【図版解説】

【論文】

- 進貢船の意匠と航海信仰（荒木和憲）
絵図に描かれた首里について（鈴木悠）
首里・那覇を描いた絵画史料について―系統分類の試み―（藤田励夫）
首里城と那覇港を描いた五つの屏風について（津波古聰）
文化財としての首里・那覇港図（地主智彦）
琉球絵画と首里・那覇港図の成立（平川信幸）
那覇港および周辺施設の変遷（外間政明）
首里・那覇港図屏風にみる漂着民・薩摩役人・民衆（豊見山和行）
島の生産と民衆生活史（真栄平房昭）
「奉使琉球図巻」およびその筆者、朱鶴年をめぐる（橋本雄）



日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 21

そそろう

粗相／麁相

普通、「そそう」は、「あらい」「粗末」「不始末」

など否定的な意味でとらえられ、通用する。漢字では本来「麁相」であるが、明治時代以降「粗相」の表記が一般的になった。そのため現代日本では、「そそう（粗相）のないように」とは言っても、「そそうになるように」とは決して言わない。

ところが、数寄茶湯を伝える茶書『山上宗二記』（一五八八年）には、「そそうに（なるように）」と肯定的に唱えられている。

『山上宗二記』

では茶人の在り様

をはじめ、もてな

し・茶室・懐石・

灰形・取り合わせの在り様に至るまで、茶湯を成り立たせる重要な諸要素について、「そそう」が積極的に唱えられているが、私はこれを善き「そそう」と呼んでいる。

善き「そそう」が登場する場面もまた注目すべきであって、それは茶人の大事な心得を示す「茶湯者覚悟十体」・「又十体」において唱えられているからである。

一方、『山上宗二記』とほぼ同時期の『日葡辞書』

（一六〇三～〇四年）には、「Soso. ソサウ Aragi. carachi.（粗き相） 不出来な、粗雑な、粗野なもの」（『邦訳日葡辞書』岩波書店）となっている。仏教関連語として荒い形相を「麁相」（梵網經、法苑珠林）といったところから転じて粗野、粗雑の意となり、不注意、思慮のないといった意味になった（『語源海』東京書籍）という。

「麁相」の「麁」の字を遡ると、元来は、「麁」と表記されていた。角のある鹿の群れは、羊のように密集しないところから、遠くはなれるという意を表し、疏・粗に通ずる（『廣漢和辞典』大修館書店）。

また「麁相」の「麁」は、仏教經典の教義では「妙」と対語として用いられたが、日本の芸論、特に金春禅竹の「麁妙論」では、無常の姿、境地を示す語でもあった。

『山上宗二記』で唱えられている善き「そそう」は、単に茶湯の原点における重要な意味を持つだけではなく、広く現代においてとらえなおされるべき哲学的な深みのある言葉であると思う。

（朴珉廷・国際伝統藝術研究会幹事）

てーたいむ

絵画史料でよみがえる 琉球王国

豊見山和行 とみやま かずゆき
(琉球大学人文社会学部教授)

藤田励夫 ふじた れいお
(文化庁主任文化財調査官)

外間政明 ほくま まさあき
(那覇市歴史博物館主幹)

那覇市歴史博物館を会場に研究会を重ねてきた成果として、琉球の絵画史料を集めた『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』が出版されました。メンバーの三人にお集まりいただき、その魅力と成果について語っていただきます。

■こんな本を作ったかった

まずは研究会がどういうきっかけでスタートしたかについてお聞きしたいと思います。

藤田・私は九州国立博物館にいた二〇〇六年に「うるま ちゅら島 琉球」展に担当の一人として関わりました。このときちょうど沖縄県立博物館が移転のため閉館中だったこともあり、屏風絵をはじめ琉球関係のよい史料をたくさんお借りできました。

当時の図録はそれらを比較することができて面白いものだったので、そのあと自分でも各地にある史料の調査を続けているうちに、いつかより充実させた書籍をつくりたいと思うようになりました。それで九博時代の同僚を誘い、またこちらのお二人をはじめ琉球に詳しい方に加わっていただき、研究会をやりましょうという話になったのです。

豊見山・研究会を始めたのが二〇一五年くらいでした。

外間・はじめは、私が那覇市歴史博物館にある屏風を素材に、描かれている場所は現在のどこであるかというのを解説しました。いま現地はこうなっていますよ、と。そして、どうせなら一緒に歩いてみよう、ということになりました。

藤田・それが定例化して、一日目は研究会、二日目は外間さんの

案内で現地を歩くようになりました。

外間…沖繩以外で研究されている方は、もちろん沖繩のことは勉強されているのですが、描かれている場所が実際どこかという話になるとなかなかわからない。そこで、描かれている場所へ実際に行つて、今の状況をみて当時の雰囲気イメージするという作業を四年ほどの間してきました。

——そうした研究会を経て、いよいよ本を作ることになるわけですが、こだわった点はどこですか？

藤田…やはり図版です。なるべくきれいな図版を、なるべく大きな判型で掲載したいと思い、それにはこだわりました。私たち以外の人も、これをもとに研究していただけるようにするために、図版をきちんとしたものにしたかったのです。そのためには再撮影が必要な史料もありましたので、けっこう大変でした。

とにかく私としては、自分の欲しかった本がやっとできたのがうれしいです。図版がいいだけでなく、研究会のメンバーによる解説がすべての史料に付いているし、今後多くの方にこれを使つてもらえたらいいなと思います。

豊見山…図版がカラーというのもいいです。これまでの本はモノクロ図版でしか紹介されていないものも多くて、それだと見てもよくわからない。今回、彩色史料はすべてカラーで掲載していますから、これまでの絵画史の研究レベルを引き上げるのに大きく貢献できるのでは、と自負しています。

■なぜ、だれのために描かれたのか

外間…この研究会ではいつも、何のために描いたのか、誰のために描いたものであるかという話題が出ていましたが、結局わからないことが多かったですね。

豊見山…絵画研究で一般的に言われていることですが、われわれにとつても、絵画史料そのものの外側、つまりどういう形で注文、制作されたのかなど、伝来がよくわからないことが、大きな課題でした。そういうところは最後まで十分に明らかにできなかったのだけれど、この出版をきっかけに関連する情報が出てくるのではないかと思っています。

そのなかで現在のベルリン民族学博物館の発注で琉球関係のさまざまな史料を蒐集したいという依頼が日本政府に来て、それが沖繩に伝達されて制作されたという、はっきりと出所がわかる例があります。明治一五、一六年くらいのこと、琉球国時代の面影が濃厚に残っている頃でした。

当時、ベルリン民族学博物館がどうして琉球に関心を持ったのか、ほんとうは知りたいところですが、なぜか琉球に関心もち、絵図だとか模型だとかをいろいろと注文している。そのなかで本書に収録した船の図の注文がはっきりとわかった。ここまで絵画制作の経緯がわかるというのは、まれな事例ではないでしょうか。

——他の史料で、はっきりと情報がわかるものはありますか？

藤田…屏風だと下張りの文書からものと所有者がわかることがあります。また讃文がついていると、たとえば明治になって沖繩に



豊見山氏

来た人が土産に買って帰ったもの、などとわかることもありですが、その程度です。

■海洋国家・琉球

——本書では「琉球船」「首里・那覇」「首里城」「那覇港」「薩摩」「中国」という六つのテーマに分けて史料を並べました。

豊見山…それが功を奏したのかなと思うのが、鹿児島や中国との関わりです。

尚古集成館所蔵の「ナカスグ中城王子上国船行列図」には、鹿児島の錦江湾の風景や琉球館など琉球人が行動していた地域がちゃんと描かれていて、琉球と薩摩は非常に密接な関係があったことをよく表していると思います。

いっぽうモノクロのガラス乾板写真しか残っていませんが、沖縄県立芸術大学所蔵の「びんこう閩江図」には、琉球が毎年のように貿易などいろいろな関係で往来していた福州・閩江の琉球館や琉球船が描かれています。とくに「閩江図」は今まではあまり注目されてこなかったように思うのですが、たいへん貴重だと思っています。

琉球・那覇を起点として、ヤマト・鹿児島と中国・福州の両方向への貿易や海外交通の様相が、この本には収録されている。琉球だけで閉じているのではなくて、外とつながっている様がこれほどまとまって示されたことは、これまでになかったのではな

いかと思いますね。

藤田…本のなかには、那覇港内に中国船を描いている絵が三つあります。清国から琉球国王を冊封するための皇帝の使いが黄色い船で来るんですが、それを描いているものには薩摩の船が描かれています。今までも何人かの人は指摘していたと思いますが、こうやって集めて見比べてみるとそれは確かにそうでした。絵画の多くは薩摩向けに描かれたのでしょうけれど、中国の視線で描かれたものもなかにはあって、それはみごとに薩摩の存在を排除している。一度に集めてみると、それがはつきりわかって面白いですね。

豊見山…国際関係が絵にも表れているわけですね。

■屏風に描かれたもの

藤田…先ほどの「閩江図」はいづみかわかんどう泉川寛道という絵師が描いたのですが、同じく彼の作品である「首里那覇泊全景図」(ガラス乾板が現存 沖縄県立芸術大学所蔵)は、首里・那覇を描いたわりと古い時代のものです。それは土地勘がそこそこあれば全体の位置関係をつかみやすい構図をしています。それがのちの時代の屏風絵になると、一様に那覇港がねじれたような構図になって、位置関係が分かりづらくなるという現象が起きます。

これもきつと「誰向けに描いたのか」というのと関係があつて、後者は外の人に向けて描いたのではないかなと思うのです。当時の人たちが鳥瞰図的に自分たちの住んでいるところを見ることはなかったでしょうから想像で書いたんでしょうが、古い時代の首



藤田氏

里・那覇図はある程度地元の人向けに、時代が下って屏風絵になると外向けに描かれるようになってきたのかな、と想像されます。――屏風絵はおっしゃるとおり空間がねじれているし、場面構成も見どころがギュッと凝縮されたものが多いですね。

豊見山…屏風は右側に首里城が描かれて左側の那覇へと展開していく構図が基本です。どうも右から左へ時の移り変わりも伴っているようにみえます。たとえば沖縄県立博物館・美術館所蔵の屏風だと、第一扇のところは首里城が描かれていて、正殿の欄間に正月用の飾り物の絵がある。そこから左へいくと湯原カタールの塩田での競馬でこれは旧暦の一月、さらに左側に場面を動かしていくと、那覇港に進貢船が入ってくる場面があり、それはだいたい旧暦の五月、六月ぐらい。爬龍舟競漕ヘリフミもだいたい旧暦の五月ごろです。いろいろな祭りが全部盛り込まれているのだけれども、場面の

展開とともに時間的にも何となく一年間になるように考えていたのかなと思うのです。そんなに明確に排列しているわけではないと思いますが。

藤田…私が疑問だったのは那覇の大きな行事である綱引きで、それだけを描いた絵はあるんですが、屏風絵のなかには登場しないんですね。

外間…それは綱引きが例年行事

ではないからではないでしょうか。何年とか何十年とかに一度しか行わない行事だと、絵師が活躍している期間に綱引きを見なかった可能性だってあります。

■お祭り騒ぎに沸く民衆

外間…民衆の描写でいうと、屏風絵には遊女を呼んで酒盛りしたり、遊興したりしている様子がすべてにわたって描かれています。これは面白いですね。

豊見山…全体的に祝祭的なお祭り騒ぎの雰囲気がよく出ていて、平和な状況なんですね。本の「解説」で書いたのですが、私はフランス船など、欧米の船がどんどん押しかけてくる直前の状況を描いたのだと解釈しました。いわば嵐の前の非常に牧歌的な時代です。

外間…ハレの日のことを描いているというのは、琉球は良い所というのを宣伝しているのですね。

豊見山…薩摩の在番奉行たちにとって対外的な危機というのは一六三〇年代、四〇年代のいわゆる「鎖国」に向かう時代と、それから明清交代の時代くらいで、そのほかは対外的な緊張感はまったくないために、あまりやることもないんです。だから祭りに行ったり、あちこちにピクニックみたいにでかけたりしていたことが那覇役人の日記からわかっており、そういうのとよく符合します。薩摩の役人を接待している場面もいっぱい出てくる。

藤田…子どもの姿もたくさん出てきますね。

外間…そうですね。赤ん坊をおぶった人もいます。



外間氏

藤田…子どもを抱いている人のなかには、男性らしい姿も見えますね。

豊見山…興味深いのは、祭りの場面などで人びとが仮面や覆面をして踊っていることです。いちおう法令上はそういう行為は禁止されているんですが、祭りの場だから特別なのか、思い通りに仮面や覆面をつけていることなども面白い。

いっぽうで、都市の労働者の姿は塩田と、漁民が落平ウディングという水が樋を伝って落ちてくる付近で漁をしている、この二つくらいしかないですね。あとはみな祭りに出てくる野次馬たち……。働いている場面が二つくらいしかないというのはちょっと不思議な感じがします。

それから首里城は、非常にデフォルメされて天守閣のある日本の城のように描かれ、実物とはかけ離れている場合があります。こういう天守閣みたいなものはどう考えたらよいのですかね。ヤマト向けにわかりやすい城のイメージってことなのかな。

外間…デフォルメされた絵があるいっぽうで、ちゃんと説明しているものもありますね。城のこのあたりに石碑が建っているとか、城壁の近くには蘇鉄を植えているとか、そういう細かいことまでを正確に描いている絵もある。

絵師が発注者の求めに応じてきちんと描き分けているのかな、という気がします。

■琉球・沖縄を知るきっかけに

豊見山…外間さんは、描かれた那覇の様子の時代ごとの変化について、面白いことを指摘していますね。

外間…私は建物・施設の変遷が、王国時代から近代にかけて絵で表現されているところが面白いと思って、今回の論考にはそのことを書きました。近代のことは写真などでけっこうイメージできるのですが、王国時代がどんなだったかというのは、文献でしかわからないですから、私もぜんぜんイメージできなかったのです。でも、研究会を重ねて複数の史料を見比べていくと、王国時代の施設が少しずつ変わっていったことがよくわかります。それが行きつくところは近代の写真で、往時の姿を視覚的に辿れるようになったのが私にとっては非常に有難かったです。

沖縄にいる我々でさえそうなのだから、本土の方たちはなおさらでしょう。船の絵にしても、進貢船なんてヤマトにはないわけです。ああいった中国的な船が日本のなかの琉球という国では使われていたということが、絵を通じてならイメージを伴って理解できます。本土の人に琉球・沖縄のことを知ってもらうためにもよい本になっていると思います。

藤田…私も九博の準備室にかかわるまでは、琉球王国のことはそれほど知りませんでした。ふつうは知らない人が多いと思います。そもそも私くらい年齢だと、中学校・高校の日本史の教科書に

出てきた琉球の記述ってほんとうに少ないのです。九博の準備室のときに沖縄の高校で使っている郷土史の教科書をもらって見たらけっこう詳しくて、全然違うな、本土の人たちの義務教育の知識だけではほとんどないに等しいな、というのがわかりました。

豊見山..そういう意味で、文化を理解する上で絵画史料からってというのは入りやすい。

外間..沖縄に住んでいる私たちは、琉球王国があったことは当然知っているのですが、私たちでさえ、じつは誰もイメージはできない。けれどもそれが、海洋国家だった、船で鹿児島に行ったり中国に行ったりしていた、またどういふふうな生活をしていたというのが今回の本をめくれば絵でわかるのですから、非常にイメージしやすくなりました。

藤田..研究会のあとに外間さんの案内でほうぼう歩いて実感したことです。首里のあたりはけっこう古いものが残っているけれど、悲しいことに那覇の街中にはまったく面影がありません。道にしてもまったく違うようにしているので、歴史地図を見て歩いても、なかなか理解しにくいところがありました。戦争のため起こったことですが、那覇ほど変わってしまったところは全国でもそうないでしょう。絵画史料は往時の姿を想像するきわめて有効なツールだといっています。

外間..それぞれの絵画は、今までいろいろな図録等にばつばつ使われていましたが、この本を見れば他のものを見なくても琉球をイメージできるようになったと作りながら感じましたよ。

豊見山..ひとつに集約される、通覧できることから、絵画史料が

がもっているイメージの喚起力というのは大きいと思います。まとめ方が妥当だったかどうかは、これから評価される必要がありますが、今回、港、船、都市といったテーマでまとめたのは有効だったと思います。

外間..私は博物館にいて、一般の方に沖縄のことを紹介する機会が多くあります。博物館に来る人は沖縄のことを理解しようとして来られる方が多いのですが、今後はより積極的に絵画史料を活用していきたいという思いがあります。沖縄に昔はこういう国があったのですよ、船で外とつながっていたのですよ、といくら言葉で説明してもなかなか理解してもらいづらい。でもこういう船や都市の絵を見せることによって、少しずつ琉球理解、沖縄理解を深めていってもらえたらいいな、と思います。

豊見山..私は絵画史料のもつ情報の豊かさをもっと追究する必要があると思います。絵画史料の難しさは、一見してわかったつもりになってしまうこと。それが実は落とし穴で、文献やいろいろな情報を総動員しながら、絵の持つ意味を追究する必要がある。思い込みで見えてしまうと、見たいようにしか見えない。それをいかに排除しながら、より絵の持つ情報を引き出せるかが大切だと思います。そのためには文献と絵画史料を行ったり来たりしながら研究をする必要もあるし、美術史の専門家とつと議論していくことも必要でしょう。そうした積み重ねによって、絵画史料が持っている意味合いをより深く豊かによくつかみ出せるのではないかと思います。

共同研究

「植民地帝国日本における知と権力」を終えて

まつだとしひこ
松田利彦

職場の国際日本文化研究センターでの共同研究「植民地帝国日本における知と権力」(二〇二三〜一六年度)を終え、成果報告書として論集『植民地帝国日本における知と権力』を上梓することになった。

この共同研究は、今までとテーマの選び方がかなり異なる。これまでではどちらかというと日本の植民地研究においてマイナーだった分野に光を当てようとしてきた。共同研究「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」(二〇〇四〜〇六年度)は、植民地官僚に思想や知性を見いだすという発想自体がややタブーだった時代に取りくんだ仕事だった。「植民地帝国日本における支配と地域社会」(二〇〇八〜一〇年度)は、韓国や台湾で単なる郷土史の掘り起こしを超えた地域史研究が活発化していたにもかかわらず、日本ではそれに呼応する研究が乏しい状況に一石を投じようとした。

これに対して、日本の朝鮮・台湾支配を「知と権力」という面から切開しようとする今回のテーマは、むしろ日本でも韓国・台湾でも一種の流行になっている。昨今の「植民地近代性論」(colonial modernity)の隆盛にそれはあらわれていよう。植民地近代性論は、

一九九〇年代における「植民地近代化論」と「植民地収奪論」の論争がいずれも近代化を無条件に肯定する発想を免れていないことを批判しつつ、二〇〇〇年前後から米国・韓国・韓国・日本の朝鮮近代史研究であらわれた。それは、解放後韓国の近代化の否定的側面を見すえ、その淵源を植民地期に探ろうという問題意識から出た。そこでは、植民地権力を支え近代化を推進した知も組上にあがることになる。

こうした「流行り物」に手をだすのは、学術研究としては無論危ういところがある。にもかかわらず、あえて「知と権力」の問題に取りくんだのは、流行の背後にある「陰」を掘りさげたいと考えたからだ。あるテーマがさかんに論じられると、その内包する限界も自ずと輪郭を明らかにしはじめる。植民地近代性論に対しても、当初のダイナミズムを喪失しているのではないかとの懐疑の声が学界からは漏れ聞こえる。論集では、「知と権力」の問題群においてむしろこれまで手薄だった領域に目を向けようとした。一つは、朝鮮や台湾統治における知を、往々にして日本本国と植民地という関係のなかに押しこめて議論してきたことへの批判

である。法学・医学・人類学・民俗学・考古学等々、日本が植民地統治で活用した近代的知識は西欧を起源とした。しかし、西欧―日本本国―植民地を連環する視角は、従来の植民地史研究では、宣教師による教育や医療活動などの研究に限られてきた。私自身の関心についていえば、植民地朝鮮唯一の帝国大学だった京城帝国大学（一九二六年開学）における公衆衛生学研究をめぐる構想を糸口にこの問題を検討したいと考えた。詳細は、論集中の拙稿「志賀潔とロックフェラー財団」に譲るが、赤痢菌の発見で知られる志賀潔の朝鮮赴任時代に焦点を合わせたものである。志賀は、一九二〇年代後半、京城帝大医学部長の座にあつて、アメリカで革新をとっていた公衆衛生学を導入しようと考え、ロックフェラー財団と交渉した。植民地医療の担い手は世界の知と深くつながっていたのである。本論集には、他にも、西欧列強の植民地統治政策に対する総督府官僚による研究、京城帝大公法学者のアメリカ留学経験などといった関連論文を収めている。

もう一つ力を入れた点は、植民地期と解放後とともに視野に入れたことである。植民地近代性論は、先述のようにもともと解放前後の朝鮮・韓国（否定的）連続性を掘り起こそうというポストコロニアリズム的な問題意識から出発した。にもかかわらず、その後の研究は、植民地期における近代性とその影響力という枠組みのなかでおおよそ完結してきた。統治者と被支配民族それぞれが蓄積した知が脱植民地化によってどのような展開を示すことになったのかは、まだ十分問われていない。本論集は、戦前の日本の大学で学んだ朝鮮人知識人が解放後にどのような役割をはたし

たか、あるいは、日本統治期台湾の大衆文化が戦後どのような評価の変遷をたどったのか、といった論考を含む。

これらは、帝国日本の知を、タテとヨコから――すなわち、戦前戦後をまたぐ時間的スパンのなかで、また、世界との関わりという同時代性のなかで――読み直し相対化する試みだと言ってもよいかもしれない。もとよりこれは私の誘導というより、班員が研究会の議論のなかで自ずとそうした認識を共有するようになったというべきだろう。共同研究において、主宰者の当初の思惑はしばしば試行錯誤を通じて変わっていくものである。

しかし逆に、二〇名以上が集った共同研究にどのように統一性を与えるかは、この論集を編むにあたり最後まで悩みの種となった。また、もう一つ反省点をあげれば、ぜひとも論集に加えたいと思っていた何人かの班員の発表が収録できなかった。おそらく大きな原因は、共同研究を進めた五年の間にも「大学改革」のために国内外で研究者が繁忙化したことにある。さらにいえば、即効的な成果を求める昨今のプロジェクト主義が幅をきかせる今日五年もかけて一つのテーマを追究するという共同研究のスタイルはもはや時代遅れなのかもしれない。せめて古き良き（？）時代の墓標になればという願いも、今回の論集にはこめている。

（国際日本文化研究センター教授）

『植民地帝国日本における知と権力』

A5判上製・九八〇頁／本体 一五、〇〇〇円

▼詳細29頁

彷徨わないう幽霊

 小山聡子
 こやま さとこ

最近、おかしな「幽霊」を見かけた。その「幽霊」の正体は、平安後期から鎌倉初期の代表的な歌人、藤原俊成（一一四〇～一二〇四）である。

俊成は、九一歳の長命でその生涯を閉じた。臨終時の様子は、息子の定家の日記『明月記』に詳細に記録されている。それによると、もはや死が近いことを覚った俊成は、自身の極楽往生を願い、抱き起こしてもらった上で念仏を唱え、「安穩」に息を引き取ったという。

俊成が生きた時代には、臨終時に心を集中させて念仏すること、すなわち正念を保つことができれば、極楽往生できるとされていた。その上、横たわるよりも座って息を引き取った方が良いとも考えられていた。ところが実際には、臨終正念を目指す者は多くいたものの、俊成のように実践できた者は珍しい。多くは、臨終正念を志しはしても、死の間際の苦しみや意識の喪失により、死の直前に穏やかに念仏を唱えることなどできなかったのである。そのような中、俊成は、大変理想的なかたちで死を遂げたことになる。にもかかわらず、俊成の死から二〇年余りたった嘉祿二年（一

一二一六）、定家は、俊成の忌日法要を行ない、「幽霊」は最後の夜半に『法華経』『勸発品』を暗誦して亡くなった、と述懐している。ここでいう「幽霊」とは、俊成のことである。亡き父を「幽霊」と呼ぶとは、どうしたことだろうか。現代ではとも考えられないことである。現代、幽霊という成仏できていない死霊を指すその上、この世で崇りなどの悪さをするとも考えられているではないか。俊成は臨終正念を保って亡くなったのである。なぜ息子から「幽霊」などと呼ばれなくてはならなかったのだろうか。また、「幽霊」が『法華経』を暗誦してから亡くなった、というのはどう考えても変である。二度死んだということだろうか。そんなわけではない。

ともかくにも、『明月記』にあるこの記事を目にしたときには大変驚かされた。記述が理解できなかったため、幽霊に関する様々な史料を紐解いてみることにした。これまで、幽霊に関する研究は、文学や民俗学の研究者を中心に進められ、古代・中世については、現代の感覚から幽霊だと考えられるものを幽霊と判断して論じてきた傾向にある。たとえば、平安時代前期の仏教説話

集『日本霊異記』には「幽霊」という語は出てこないにもかかわらず、それらしき存在を幽霊だと決めつけて論が進められてきた。おまけに、幽霊という語は世阿弥以前にはほとんど使われてこなかったと説明されてきており、その論をその後の研究者は疑うこともなく継承してしまっている。

「幽霊」にされた俊成の記述は、これまでの研究の見直しを迫るものである。実は、意外に思われるかもしれないが、古代から中世にかけては、文学作品ではなく、古記録や古文書（特に願文や寄進状）に非常に多くの「幽霊」が出てくるのである。

また、幽霊という語が示す意味も、現代とは大きく異なっている。文脈を見る限り、定家は、俊成その人を「幽霊」と言っているのであって、俊成の死霊を「幽霊」と呼んでいるのではない。「幽霊」という語には「霊」の字が付いているものの、必ずしも霊を指しはしなかったのである。つまり、必ずしも、成仏できなかった死霊を「幽霊」と呼んでいるわけではない。調べてみると、このような事例は、『明月記』ばかりではなかった。

たとえば、元徳三年（一二三二）の「崇顕（金沢貞顕）諷誦文案」（鎌倉遺文）古文書編四〇所収）には、「先妣幽霊、下世以降……」とある。「先妣」とは亡き母、「下世」とは亡くなることを指す。この「幽霊」を現代的な意味で解釈してしまうと、「亡き母の幽霊が亡くなって以降……」となってしまう、なんともおかしいことになってしまふ。つまり、ここでも「幽霊」は、あくまでも故人を指すのであり、故人の霊を指したりはしない。このほか、「幽霊」は良い人だった、などと「幽霊」を称賛する内容の古文書もしばし

は目にすることができる。古記録と古文書を丹念に紐解いた結果、彷徨わない幽霊の事例は古代から中世にかけて珍しくはないことがわかった。「幽霊」にされた俊成は、決して特例ではないのである。

幽霊に関する学術論文や研究書は、これまで多く出されてきた。それにもかかわらず、古文書や古記録に「幽霊」について非常に多く見えることが明らかにされてこなかったのは、大変意外である。おそらく、「幽霊は人間が考えだした想像上のものだから文学作品に登場するに決まっている」という現代的な思い込みから古記録や古文書に出てくる「幽霊」が調べられてこなかったのだろう。『日本霊異記』の幽霊のように、存在していなかった幽霊が幻視されてきたことも、幽霊的と言えるかもしれない。

さて、最後に少々宣伝を……。二月に刊行された小山聡子・松本健太郎編『幽霊の歴史文化学』は、これまでの日本人が幽霊を感知し、さらにそれを表象するためにいかなる工夫をしてきたのかを、歴史学、メディア学、文学、美術史学、宗教学、社会学、観光学、地理学といった専門分野の研究者が、多角的視点から論じた本である。ここには、二〇一六・二〇一七年度に行なわれた「死霊表象研究会」の成果が収録されている。新知見も非常に多く含まれているので、ぜひ手に取っていただきたい。

（二松学舎大学教授）

小山聡子・松本健太郎編『幽霊の歴史文化学』

四六判上製・三四四頁／本体二、五〇〇円 ▼詳細36頁

五条坂の地域史と研究の隙間

木立雅朗 きだち まさあき

五条坂は京焼・清水焼の伝統的産地だ。考古学研究者である私は、鳴滝乾山窯^{なるたきけんざん}の発掘調査を契機に、参考資料を探して五条坂を訪れた。二〇〇一年前後からだと記憶している。

有田や瀬戸では窯跡の発掘調査と研究が進んでおり、たとえばそれが美術史研究であったとしても、発掘調査の成果から学ばなければ研究ができない。ところが、京都では近世以降の発掘調査が著しく遅れていたため、考古学の成果自体が僅かしかなかった。二〇〇六年に京都国立博物館で「京焼——みやこの意匠と技——」展が開催され、研究が大きく進んだとはいえ、その蓄積は有田や瀬戸と比べものにならない。

五条坂では偶然に藤平陶芸^{ふでひら}の登り窯（現在「五条坂京焼登り窯（旧藤平）」）を知り、通いつめた。二〇〇三年頃、戦跡考古学をやりたいという学生（萬野翔子さん）が相談してきたため、藤平陶芸の末広直道社長から聞いていた「陶器製手榴弾」の調査を勧めてみた。工房の片隅におかれた土管のようなマルロ陶器の中から二五〇個以上の陶器製手榴弾が出てきたときには、本当にびっくりした。萬野さんは各地の陶器製手榴弾とも比較し、全国には三つの

タイプの陶器製手榴弾が製造されていたこと、京焼は備前焼と同じパイナッフル状の形をしているが、戦地では出土していないこと、沖縄本島や硫黄島では信楽や有田のボール型の製品が実際に使用されていたことが明らかになった。各地の産地でも陶器製手榴弾の在庫が残っていたことから、「陶器製手榴弾は作つたけれども使われなかった」と言われる場合があつたが、それは一部の産地のことにすぎなかった。また、陶器製手榴弾は「自決用だった」とも言われていたが、藤平陶芸では「自活兵器」だと言われており、本土決戦のために製造された可能性が高いことも明らかになった。愚かな武器として知られる陶器製手榴弾であるが、実は、狭い地域の研究しかなされておらず、全国的に比較する研究がなかったことを、萬野さんの卒業論文によって気づかされた。

実は、萬野さんは最初、「銃の研究をしたい」と相談してきたので「銃が出土したという話は聞いたことがないから、実際に出土している遺物の中からテーマを選びなさい」と指導した。その上で、出入りしていた藤平陶芸で小耳に挟んだ陶器製手榴弾の研究を勧めたという経緯がある。ところが二〇〇六年以降、萬野さ

んの研究が報告されると、「こんなものもあるよ」と戦跡考古学関係の発掘情報がいくつか寄せられ、なんと、戦時中の銃が含まれていた。近代の遺物は「埋蔵文化財」として認知されていないかったため、調査して見つかったとしても、報告書に掲載されていないかったのだ。「よくぞ、収集して下さった」と感謝したが、萬野さんからは「先生、嘘つき」と言われてしまった。その後も小学校や師団跡から銃をはじめとする武器類の出土が確認された。調査研究の道は厳しいが、終戦直後に武器類が廃棄されたことを示す動かぬ物的証拠だ。進駐軍に引き渡されなかったこれらの遺物は、「引き渡し」の実態を示すものとして重要である。

五条坂に出入りするうちに、道仙化学製陶所窯跡の発掘調査をしないかという誘いを受けた。ちょうど鳴滝乾山窯跡の発掘調査が終わった時だったため、応じることにした。タイムトンネルを抜けたような路地奥には職人長屋も残されていた。理化学陶磁器を専門に焼成している会社で、窯の後半部分を京焼の陶工に「貸し窯」していたという。巨大蒸発皿や乳鉢などを製薬会社に販売していた。そのような理化学陶磁器が焼かれていたことも五条坂の意外な一面だろう。

この発掘調査がきっかけとなり、登り窯と長屋の歴史的空間を見直し、長屋を改修することになった。長屋の掃除なども手伝わせて頂いたが、驚いたことに防空壕がそのまま現れた。京都市内は本格的な空襲にあつていないため、戦前の町家がそのまま残り、防空壕も数多く残された。しかし、長屋に急造された防空壕は建物傷めるため、戦後に埋められたものが多い。これを契機にい

くつかの防空壕を観察しはじめたが、ちょうど、そのころ、小出順子氏ら建築関係者もチームを作って防空壕の調査を始めていた。小出さんはたまたま自分が設計する町家から防空壕がでてきたため、その歴史を調べてみて驚いたという。防空壕はよく知られており、すでに研究されているものと思っていたが、「誰も調べていないことを、誰も知らなかった」のだ。道仙長屋のような長屋の防空壕は早くに埋められたものが多いが、立派な邸宅や近代化建築の場合、重厚な地下室がはじめから設置されており、それが防空壕に転用されることも多かった。そのため、転用された防空壕が人々のイメージとして残りやすい。そうなれば「伝説」が一人歩きするのは、陶器製手榴弾の場合と同じだ。研究分野の隙間に入り込んだ物的証拠は、そうやって埋もれてゆくのだろう。

誰も調べていなかった資料は他にもあった。私が見聞きしたものは、五条坂の地域史を研究すれば自然にたどり着くものにはすぎないが、それでも多様な研究の隙間に落ち込んでしまっていた。今現在、京都はホテル建設ラッシュで景観が急速に変わつつある。これまでは町家の片隅に残されてきた資料類も、人知れず廃棄されている可能性が高い。これまでもそうだったが、この急激な変化のなかでは、隙間に埋もれていたものを救いすることは不可能だ。ため息しか残らない。

(立命館大学教授)

並木誠士編『近代京都の美術工芸』

A5判上製 六〇八頁／本体二、〇〇〇円

▼詳細34頁

井戸から考える天神さんの神仏習合

佐々木 創

この春開かれた展覧会「北野天満宮 信仰と名宝——天神さんの源流——」（京都文化博物館）に関わる機会を得た。同展の図録執筆を契機に現在考えていることについて記したい。

論考では「ぶんあん文安の癡騷動」について検討した。これは文安元年（一四四四）に起きた西京神人（にしきょうじん西京に住み癡の製造・販売の利益をもつて北野社に奉仕する人びと）と室町幕府との合戦のことで、その結果、北野社は堂舎の大半を消失した。神人が立て籠もった「あか閼伽井経蔵」（いきやうぞう經典を収める蔵「経蔵」に隣接または内包して、神仏に供える水を汲む井戸「閼伽井」があった）の場所是不明だが、菅野扶美氏によれば、足利義教の北野社万句連歌において一四人の連衆による座が設けられたほど、広い空間を合わせ持つ場所であったという。

現在の北野天満宮を見るとこのような建造物が存在し得る空間はないように感じるが、実は中世の北野社は今よりも西に拡がっていた。基底部が一メートルあるとされる「おどい御土居」がなかったからである。私は基底部を含む境内西側に閼伽井経蔵があったのではないかと考え、ベースに「慶長御再興指図」（こうそう北野薬草図書所収）を用い、そこに「北野光乗坊文書」（東京大学史料編纂所蔵）の

記述を落とし込み、中世北野社の概念図を作成してみた。

そこで私が注目したのは境内西側に描かれた「水ヤ」の存在だった。境内東側に描かれた「水屋」が御供所の八嶋井であることを考えれば、西側の「水ヤ」も井戸なのではないだろうか。私はこの場所が現在どうなっているのか気になり現地に行ってみることにした。

天満宮本殿西側の色鮮やかな連棟の八つの末社と真新しい事務所との間、小道の奥にその井戸はあった。奥まった空間のせいもあるとかなり暗い。井戸の中央には巨大な石の井桁があり、木の蓋が置かれて使われている様子は感じられない。しかし聖域として忘れられているわけではなく、井戸を覆う瓦屋根と木製の柱の上部には注連が巡らされている。井桁周囲には石畳が敷かれ、石の柵で囲まれて手前が木製の扉になっている。井戸の右側には「御神用水」と刻まれた石標があり、位置関係から考えて指図の「水ヤ」はこの「御神用水」の場所に違いない。

元文二年（一七七七）の遷宮記録によれば、「御神用水とある井

戸」の囲いの石垣は、宮仕能知の旦那方より寄附された。以前から存在していた井戸に追加する形で、新たに囲いが寄進されたのだろう。書きぶりからは御神用水がこの時点で有名無実だった可能性をも感じる。この御神用水について山本博氏は、井桁は御影石の一枚岩、井戸の深さは水面まで四メートル半・水深五メートルとする。またこの種の井桁は、織豊期から江戸初期にのみ見られるとし、天正一五年（一五八七）の北野大茶会に關わる秀吉の創掘とする（ただし、既存の井戸に対し、のちに井桁が追加された可能性も否定はできないだろう）。しかしながら、中世の關伽井の場所が特定できない以上、現存の「御神用水」と中世の關伽井とのつながりは分からない。ただ、こんな風に考えを巡らせていたときに、ふと關伽井についての別の考えが浮かんできた。

中世の北野社において「第一重事」＝最重要とされた七夕の御手水神事には、關伽井から汲んだ水を用いる。これも菅野氏の図録所収論考によると、關伽井から汲まれた水は神前での唱えごとによって聖水となり、人びとがお下がりとしてもらい受け、飲む。同時にこの神事は詩歌の制作を望む菅公（菅原道真公）の託宣に込めるものもあるという。

以上のような現実に行われた神事の様子と、關伽井という仏教的名称とを考え合わせれば、御手水神事には神仏二つの要素が融合していたと理解できる。

一つは観音への關伽供えとそのお下がりから成る信仰、もう一つは菅公の託宣に応え詩歌制作の場を整える法楽である。

神仏に捧げられ、下賜され、健康を願って飲まれる水を「香

水」というが、なぜ天神さんに香水の信仰があるのか？ また、このように観音と菅公とが神格としても、神事としても習合する積極的理由とは何だろうか？

北野社創建当初の京都で疫病が流行していたことは『北野天神縁起』からも読み取ることができる。疫病を鎮めるためには疫神やそれを指揮する怨霊に詩歌管絃を捧げて法樂し、經典の読誦によって慰撫し、御霊となすべく祀る必要があった。当時最強の怨霊たる菅公を祀る拠点として相応しい新しい場——朝日寺の観音の座す北野の地には、疫病に対抗する香水の信仰があったのではないだろうか。

そして御手水神事は、このような観音と菅公との出会いの由来、つまり北野社の成り立ちを説明するものであり、それゆえに北野社ではこの神事が最重要とされたのではあるまいか——御手水神事が七夕に行われる理由についても、これを解くカギは御霊信仰にあるように思う。

今後の検討を要することも多いし、証明できないこともあるだろう。疫病に立ち向かった先人に思いをいたしながら、少しずつ明らかにしていけたらと思う。

（京都造形芸術大学非常勤講師）

「知の世界」への入り口をひらく

丸川雄三
まるがわ ゆうさう(国立民族学博物館)

「起きて半畳寝て一畳、天下取つても二合半」。この言い回しは、わたしたちが与えられた身体を保ち生きてゆく上で、それほど多くを望む必要のないことを思い出させてくれる。二〇三〇年を迎える頃には、よく知られるこのことわざに「情報」にまつわる句が加えられているかもしれない。

ここ一〇年で急速に発達し普及したスマートフォンと高速通信ネットワークは、文字通り四六時中、公私をないまぜにした情報交換の修羅場へと人々を誘うことに成功した、とは言い過ぎであろうか。SNSは日常の生活場面に欠かせないものとなり、同時にインターネット上の電子広告や商取引が、旧来のメディアを超えて確固なものになりつつあることは、関係する会社の等比級数的な隆盛を見れば明らかである。

情報の荒海に竿差しながら、毎日の健やかな暮らしに本当に役立つ知恵や教養をどのようにして身につければよいのか。後述する「文化遺産オンライン」など、文化財における情報発信に携わる身としても、真面目に向き合わなければならない切実な問題だと感じている。

筆者が以前所属していた国立情報学研究所の連想情報学研究開

発センターでは、いずれ到来すると考えられていた情報爆発の未来を見越し、受け手側が主体的に情報へアクセスできる仕組みづくりに取り組んできた。二〇〇六年に公開した「新書マップ」は、連想検索とその技術を活用したその代表的なサービスである。

新書マップは、人文社会から理工学まで含む幅広いテーマによる読書案内である。岩波書店や中央公論新社などの出版社が発行する新書シリーズ一万冊以上の書籍を対象に、一般読者の興味をひく話題を、一千を超えるテーマで取り上げている。たとえばテーマ「日本古典文学を楽しむ」の読書案内では、わかりやすい入門書として『日本文学の古典』（西郷信綱・永積安明・広末保著、岩波新書、一九六六年）が、また古典を読む喜びを、情熱を持って伝える書として『古典を楽しむ―私の日本文学―』（ドナルド・キン著、朝日選書、一九九〇年）を紹介している。

テーマを探すための入り口は、開発当時としてはめずらしく、くるくると回る動きのある画面で構成しており、そこで例えば「光」という問いかけをすると、「色彩」や「物理学」の他に、連想検索によって「植物の力」あるいは「マグロ」といった光合成に係するテーマまでもが提示される仕掛けがほどこされている。さ

わる楽しさと同じく喜びを演出することは、利用者が主役となる情報アクセスにとって本質的な機能なのである。

次に紹介する「文化遺産オンライン」は、文化財と出会う楽しさを味わうことができるウェブサイトである。同研究所が新書マップに先立って二〇〇四年四月に公開した「デジタル版ミュージアム」であり、全国の美術館、博物館、資料館などのミュージアムが所蔵する作品や資料の情報を、各館の担当者がオンラインで登録して公開することができるウェブサービスである。文化庁と国立情報学研究所が共同で運営し、二六万件を超える作品の情報を公開している。

文化遺産オンラインでは、誰もが簡単に作品にふれられるように、わかりやすい「時代」や「分野」といった入り口を設けているが、実際にはGoogleやYahoo!などの検索サービス経由で作品の詳細ページへ直接アクセスされる方も多く、そのきっかけも多様であるようだ。世界遺産登録のニュースや、テレビの美術情報番組で取り上げられた直後は、関連する作品へのアクセスが顕著に増える。この他に、ゲームやアニメーションなどのキャラクターとして擬人化された、著名な刀剣類へのアクセスも今なお根強く続いている。

どのようなきっかけであれ、文化財に興味を持ち、その過程で文化遺産オンラインのような一般向けのサービスにふれる機会が増えるのはよいことである。日本の各地に残る作品や資料、名所、旧跡などを実際にその目で見ようと、国内のみならず海外から訪れる熱心な旅行者も増えている。観光客向けの情報発信と人文社

会科学分野のデータベースとの連携はまだあまり進んでいないが、二〇三〇年頃には、それらを活用した一般向けのツアーガイドアプリなどが専門家の監修のもとで作られ、爆発的な人気を集めているかもしれない。

冒頭でふれたように、住まいや食事などの物質的なぜいたくを戒める教えは古くからあるが、今は時間や心のエネルギーの浪費にも気をつけなければならない時代である。もはや情報空間とのつながりを持たない生活は考えられないとすれば、その貴重な時間を、誰もが自主性をもち豊かに過ごすことが求められるだろう。

人文社会科学分野のデータベースは、専門的な調査と研究を目的としてコンピュータが実用化された初期から構築され発展してきた。しかし専門家ではない人々が利用できるような形で情報発信はまだ十分とはいえない。その実現は人生をより豊かにする「知の世界」への入り口となる可能性を秘めており、ここで紹介した「新書マップ」や「文化遺産オンライン」はそのひとつであると考えている。

人々が大切な時間を有意義に過ごすことができるよう、良質な情報にふられる場の発展に、今後も様々な形で取り組んでみたいと思う。

豊臣秀吉を支えた小出秀政——直轄地支配の担い手——

大澤研一
おおさわ けんいち(大阪歴史博物館学芸課長)

その出自が明らかでない豊臣秀吉が天下人へと上り詰めていく

姿は、小説の世界でも学術研究の世界でも多くの注目と関心を集めてきた。そして彼に関する研究書の刊行が依然続いていることは彼に関する謎がまだまだ解消されていない証拠であろう。ここで紹介するのは、その秀吉による大坂城下町運営にかかわる史料であるが、秀吉が関与した城下町の実態についてもわからないことが少なくない。

秀吉の城下町といえば大坂を思い浮かべる人は少なくないだろう。筆者が勤務する大阪歴史博物館は平成一三年(二〇〇一)の開館以来、都市大阪の歴史と文化を紹介すべく幅広く研究・展示・学習支援活動を展開してきた。そのなかで秀吉の大坂城下町は重要な研究テーマのひとつとなっており、常設展示や特別展で考古・文献史料を通じて紹介してきたところであるが、ここで取りあげるのは大坂城下町の運営の一端を伝える小出秀政禁制である。

制札

於天王寺勸進能在之付而、喧嘩・口論・国質・所質之事、

右旨堅可令停止者也、若違犯輩者ハ、不及是非可為曲事者也、

天正廿年卯月日

小出播磨守(花押)

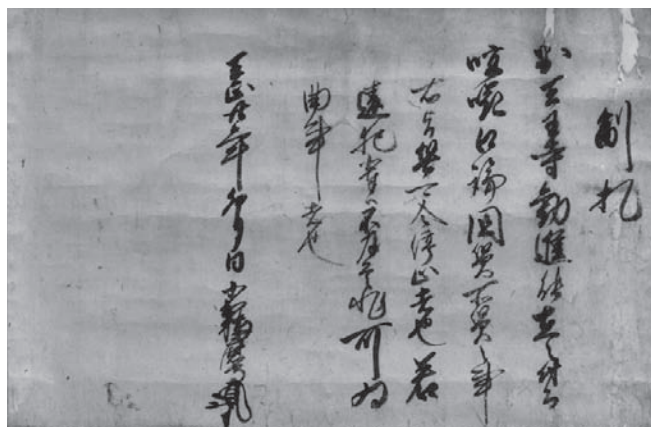
まず小出秀政について簡単に紹介しよう。秀政(二五四〇―一六

〇四)は秀吉と同じく尾張国中村の生まれで、さらに秀吉の伯母栄松院日寿を妻とした。そのため秀政は秀吉一門の筆頭に位置づけられる人物となった。秀吉が信頼できる一門・一族をとりわけ大切に遇したことはよく知られているが、秀政の動きを探ってみると天正三年(一五七五)に秀吉書状の取次をおこなったほか、同五年には秀吉居城の姫路城普請に参加し、同一〇年にも姫路の留守衆の一員に名をつらねた。そして、秀政は同一二年頃から石川光重らとともに秀吉の側近六人衆を構成した^{〔1〕}。この六人衆は天正末年頃まで秀吉政権を支える直臣団であり、秀政が継続して秀吉

を間近で支えていた様子が知られる。

この六人衆の多くは河内国の郡および寺内町の代官・領主に任じられたが、小出秀政はどうだったのか。そこで秀政の発給文書

小出秀政禁制 天正二〇年（一五九二）
大阪歴史博物館蔵



をうかがってみると、大坂城下町建設が開始された天正一一年には摂津平野（ひらの末吉家文書）、翌一二年には天王寺牛市（うしいち石橋家文書）という中世都市の系譜につらなる地域に文書を発しており、さらにその翌十三年には和泉国の拠点城郭と目された岸和田城に三万石城主として入城している。そして少しあいだは開くが、再び四天王寺に関与したのがこの天正二〇年の禁制である。実は天正四年、四天王寺は織田信長と大坂本願寺の戦争に巻き込まれて焼失していた。その後同一年、四天王寺は秀吉により大坂城下町の南端に位置づけられ復興の途についたかにみえたが、実際の復興の動きはまさにこの禁制の頃からだった。本史料は復興に向けて催された勧進能の場における喧嘩等を秀政の名でもって禁止したものである。

この時の秀政の立場はどのようなものであったのか。もう少し史料をみてみると、秀政は文禄四年（一五九五）に北政所領からの年貢運上を秀吉から命じられている（木下家文書）。そしてその所領は既述の文書発給先である平野・天王寺を含む摂津国關郡（かへぐん東成郡・住吉郡）に広がっていた。大坂城膝下のこのエリアは豊臣家蔵入地（くらいりち直轄地）だったのであり、秀政は一門だったこともあってこの一帯の代官を任され、四天王寺の復興へもその立場で関与したとみるのが妥当だろう。

一方、秀政はもうひとつの顔ももっていた。それは大坂の「町奉行小出播磨守」である（『義演准后日記』慶長四年〔一五九九〕二月一四日条）。町奉行とは都市支配の最高責任者である。そして秀政はこの史料に先立ち、文禄四年に浄照坊兵部が家を買得した際の承

認を与えたことが判明している（浄照坊文書）、これはまさに町奉行の権限にもとづく行為なので、その就任はさらにさかのぼるといえよう。

町奉行の出現自体は織田信長晩年にみられるものであり、大坂でも城下町建設の開始まもない天正一四年に「町奉行」三人が存在したことが知られている（『貝塚御所日記』、ただし人名不詳）。ちなみに、大坂の北に隣接する天満寺内町では当初本願寺坊官の下間氏が町奉行であったところ、天正一七年の牢人衆隠匿発覚事件^②をきっかけに増田長盛・石田三成が上位の奉行に任じられ寺内町支配に介入する事態に至った。これはやや特殊な事例ではあるが、いずれにしても町奉行による城下町支配が秀吉膝下の大坂で早くから導入されたことはまちがいないだろう。そして小出秀政はあの段階でその任務に就いたのだった。

このように秀政は蔵入地の代官であり、大坂城下町の町奉行でもあった。この両者に共通するのは秀吉の直轄地支配の担い手という点である。秀政は秀吉のもとで重責を担い続けたのであり、その活動の一端を知らせてくれるのがこの禁制ということになる。なお、慶長二〇年の史料によれば大坂城二ノ丸内に「前小出はりま屋敷」（元和大坂役将土自筆軍功文書^③）があったという。二ノ丸に屋敷を構えていることも秀政が秀吉政権のなかで重きを置かれる人物だったことの証左である。

しかし秀吉が没してまもない慶長五年、関ヶ原の戦いがおきたこの状況に直面した秀政は自身が家康に従い、さらに二人の息子を一入ずつ東西に分けて家の存続を図った。この策は功を奏し、

秀政はその四年後に六五歳で生涯を終えたものの岸和田城主は長男吉政が継承することができた。ここに至って豊臣家とともに歩んできた小出家は徳川大名として生き延びる道を選ぶことになったのである。

註

- (1) 寺沢光世「秀吉の側近六人衆と石川光重」（『日本歴史』五八六、一九九七年）。
- (2) 聚楽第で秀吉を誹謗する落書が発見され、警備責任者に処罰が下された。しかしその後、関係者の天満寺内町潜伏が発覚し、本願寺関係者や匿った町人が厳しく処分された。

- (3) 拙著『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』（思文閣出版、二〇一九年）。

大阪歴史博物館

【所在地】

〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前4丁目1-32
TEL:06-6946-5728 FAX:06-6946-2662
ホームページ: <http://www.mus-his.city.osaka.jp>

【交通アクセス】

■大阪メトロ谷町線・中央線[谷町四丁目駅]／シティバス[馬場町]

【開館時間】

午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

【休館日】

火曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始

【常設展示観覧料】

大人600円（540円）、高校生・大学生400円（360円）

※（ ）内は20名以上の団体割引料金

※中学生以下・大阪市内在住の65歳以上（要証明証提示）の方、障がい者手帳等をお持ちの方（介護者1名を含む）は無料。

【催しの予定】

◆特集展示「なにわ人物誌 三好木屑」3月20日（水）から5月6日（月・振休）まで

火曜日休館。ただし、4月30日（火）は開館。

※常設展示観覧料でご覧いただけます。

◆小出秀政禁制は5月1日より常設展示で公開します。詳しくは当館HPをご覧ください。

▼子どもの頃に見た心靈番組が、今でも印象に残っています。新刊の『**幽霊の歴史文化学**』(10・36頁)を読みますと、時代によって、幽霊の定義が変わっていき、かつ現代社会においては「霊的なもの」がSNS等のデジタル空間にまで現れてくるのがわかります。そういうえば、本から幽霊が出てくる事例はあまり聞きません。今後、紙の本を通り越して、デジタルな電子書籍を媒介に出現するのでは? なんだか興味がわいてきました。(一)

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

洋学史学会(電気通信大学)	5/12(日)
美術史学会(京都工芸繊維大学)	5/17(金)・19(日)
日本比較文化学会(同志社大学)	5/18(土)
中古文学会(共立女子大学)	5/18(土)・19(日)
歴史学研究会(立教大学)	5/25(土)・26(日)
明治維新史学会(京都橘大学)	6/8(土)・9(日)
茶の湯文化学会(同志社大学)	6/16(日)
大阪歴史学会(関西大学)	6/30(日)
日本文学協会(京都女子大学)	7/7(日)

▼「沖繩にいたるわたしたちでさえ、じつは(琉球王国を)イメージできない」。外間先生の発言は強く印象に残りました。今回の出版が琉球史研究に寄与することを期待します。(M)

▼会社近くに紙鍋が名物のお店があり、ついに行くことができました。火が紙に直接あたるのに、なぜか燃えない! 不思議! 建物は文化財級。大きな招き猫が迎えてくれます。(大)

▼そろそろダムカードを入れるファイルが欲しい今日この頃。大阪に初期の砂防ダム(堰堤)があるそうなので、カードはたぶんもらえませんが、行ってみようと思います。(m)

▼街を歩くとき様々な言語が飛び交っています。各国からの来日は嬉しくもあるけれど、ここまで増えると若干怖いと思うのは私だけでしょうか。(き)

▼表紙図版:進貢船(「琉球風俗図」国立国会図書館蔵/「琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究」より)

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.108

2019(平成31)年4月15日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン HON DESIGN

倉本一宏（国際日本文化研究センター教授） 編

説話研究を拓く

— 説話文学と歴史史料の間に —

3月刊行

A5判上製・四五二頁／本体九、〇〇〇円

説話とは何か。

まったくの創作でもなく古記録でもない、このつかみどころのない作品たちはなぜ生まれ、いかに編纂され、そして伝えられたのか。

日本史学や日本文学、宗教学、文化史学の研究者が一堂に集い、「説話」という文学ジャンルを解明すべく企図された、国際日本文化研究センター共同研究の成果32本。

説話文学と歴史史料の間に往還しつつ、説話研究に新たな地平を拓く。

倉本一宏著

『御堂関白記』の研究

11月刊行

A5判上製・三八八頁／本体八、〇〇〇円



藤原道長の日記『御堂関白記』について、長年先駆的な研究を深めてきた著者による、論文からエッセイまでを蒐めたアンソロジー。特に自筆本と古写本の特質を抽出し、その座標を確立することで、古記録研究そのもののや撰関政治論・王朝文化論に資する。

第一部 説話と歴史史料
第二部 説話の生成
特集 説話の国際性

第三部 内在する歴史意識
第四部 説話の変容



山中裕編

御堂関白記全註釈「全16冊」

A5判上製函入・平均二五〇頁／揃本体一〇七、〇〇〇円(分売可)



平安時代を代表する一級史料、藤原道長の日記「御堂関白記」の原文・読み下しと詳細な註により構成するシリーズ全16冊。入手困難な第一期(国書刊行会・高科書店発行)の全8冊を復刊。

御堂御記抄／長徳4年～長保2年・寛弘元年・寛弘2年・寛弘3年・寛弘4年・寛弘5年・寛弘6年【改訂版】・寛弘7年・寛弘8年・長和元年・長和2年・長和4年・長和5年・寛仁元年・寛仁2年上・寛仁2年下／治安元年

大津透(東京大学教授)

池田尚隆(山梨大学教授) 編

藤原道長事典

―御堂関白記からみる貴族社会―

【好評増刷】 A5判上製・四六二頁／本体六、〇〇〇円



藤原道長の日記『御堂関白記』に頻出の語句をとりあげ、11の大分類に整理。各ブロック冒頭には、専門の執筆者による詳細な解説を収録。『御堂関白記全註釈』(全16冊)を通して、最新の研究成果に基づいた新たな平安期の貴族社会像を提示する。

皇學館大学神道研究所編

訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀

『儀式』―踐祚大嘗祭儀上・中・下―の訓読・注釈研究の成果

本体一五、〇〇〇円

中野渡俊治著

古代太上天皇の研究

奈良～平安時代における太上天皇の地位の歴史の変遷を解明

本体五、四〇〇円

臈谷寿著

平安王朝の葬送―死・入棺・埋骨―

摂関院政期の天皇・貴族の葬送儀礼を通覧し、皇権の在り方を考察

本体三七、〇〇〇円

山中裕著

栄花物語・大鏡の研究

両書に内包される歴史書としての特徴や歴史的意義について論究

本体七、二〇〇円

法隆寺編

法隆寺史上

—古代・中世—

A5判上製・五五四頁／本体六、八〇〇円



寺所蔵数万点におよぶ膨大な文書・記録を整理し、新史実を盛り込んだ法隆寺の姿を明らかにする。1400年にもおよぶ歴史を通観する初の寺史。全3巻構成。中巻（近世）は2019年度刊行予定、下巻（近代）の刊行時期は未定。

大山喬平（京都市立大学名誉教授）

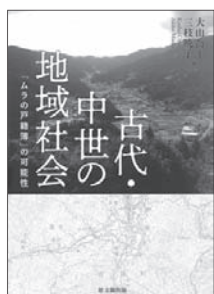
三枝暁子（東京大学准教授）編

古代・中世の地域社会

—「ムラの戸籍簿」の可能性—

9月刊行

A5判上製・五五四頁／本体九、〇〇〇円



政治史や社会経済史、宗教史、都市史などの専門家20名が、日本全国のムラの成立過程や、「戸籍簿」作成の過程で見出した地域社会・個別のムラの特徴について分析の深化を試みた、「ムラの戸籍簿」研究会の10年におよぶ活動の集大成。村落史研究の新たな地平を拓く。

松園齊（愛知学院大学教授）著

中世禁裏女房の研究

11月刊行

A5判上製・五五二頁／本体八、〇〇〇円



中世という激動の時代、翻弄される朝廷を支え、中世文学の担い手として活躍した禁裏の女房たちの実態に迫るべく、さまざまな文献資料を渉猟し、丹念に繋ぎ合わせることで、一人ひとりの軌跡を追い、さらにその全体像の復元を試みた力作。

工藤美和子（華頂短期大学教授）著

賢者の王国 愚者の浄土

—日本中世誓願の系譜—

4月刊行

A5判上製・二八〇頁／本体 六、五〇〇円



工藤美和子著

平安期の願文と仏教的世界観（オンデマンド版）

願文の分析から、人々の仏教理解や信仰のあり方を考察

本体 七、四〇〇円

山田雄司著

崇徳院怨霊の研究（オンデマンド版）

日本史上最大の怨霊を細部にわたり検討し解明する

本体 六、四〇〇円

平安初期から院政期にかけて、みずからがもつ知識と財力によって理想的世界を実現する義務を負っている「賢者」としてふるまい、人々を悟りへと導こうとした文人貴族や摂関家の有力者、天皇・上皇がいた。一方、中世初期には、人は仏の誓願の力によってしか救われない存在であると気づき、自らは「愚者」であると自覚した法然とその周辺の人々があらわれた。過去の「賢者」と「愚者」がそれぞれに構想していった理想世界を、彼らの誓いの言葉を通して追うことで、日本浄土思想史に新たな知見を示す。

第Ⅰ部 賢者の王国

菅原道真の仏教信仰

「狂言綺語は讃仏乗の因とす」——勸学会とは何だったのか
院政——天皇と文人貴族たち

第Ⅱ部 愚者の浄土

貞慶の『舍利講式』と『愚迷発心集』——愚かであること（一）

法然の語り——愚かであること（二）

法然の継承者たち

中井真孝著

法然上人絵伝の研究

法然上人絵伝研究を集成大成した学界待望の論文集

本体 九、五〇〇円

森新之介著

摂関院政期思想史研究

摂関院政期における民衆仏教史観の実像を描き出す

本体 六、五〇〇円

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書(十三)

リ函二・ヌ函一

9月刊行

A5判上製函入・四六二頁／本体 一三、五〇〇円



東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期までの総数一八、〇〇〇点・二七、〇〇〇通におよぶ日本最大の古文書群である東寺百合文書。「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カナ之部」を翻刻。

伊藤俊一（名城大学教授）

富田正弘（富山大学名誉教授）

本多俊彦（金沢学院大学准教授）編

東寺廿一口供僧方

評定引付 第4巻

4月刊行

A5判上製函入・三三八頁／本体 六、五〇〇円



「東寺百合文書」のなかに含まれる「東寺廿一口供僧方評定引付」を編年順に編集・翻刻し、校定・注釈（とくに関連文書の注記）を加える。

東寺の宗教活動や荘園経営の実態、商業活動や庶民生活など、室町・戦国期の政治・経済・社会・文化を伝える超一級の資料。
(第1期全4巻)

上島有・大山喬平・黒川直則編

東寺百合文書を読む―よみがえる日本の中世―

東寺百合文書の中から50点を選び、魅力の一端を紹介する

本体 二、五〇〇円

上島有著

中世アーカイブズ学序説

中世・近世にまたがる個別文書群について論究

本体 一三、〇〇〇円

東寺文書研究会編

東寺文書と中世の諸相

東寺文書研究会による最新の研究成果19篇

本体 一、〇〇〇円

早島大祐編

西山地蔵院文書〔京都大学史料叢書6〕

室町期社会経済史上の重要な史料を影印・翻刻

本体 一三、〇〇〇円

大澤研一（大阪歴史博物館学芸課長）著

戦国・織豊期

大坂の都市史的研究

3月刊行

A5判上製・五八二頁／本体 一三、三〇〇円



文献をはじめこれまで未活用だった絵図や出土遺物の墨書など多彩な史料を駆使し、16〜17世紀初頭にかけての都市大坂の変遷過程を具体的に実証し、都市史における意義を明らかにする。

新谷和之（近畿大学特任講師）著

戦国期六角氏権力と

地域社会

A5判上製・三五二頁／本体 九、〇〇〇円



在地領主や惣村・寺社などの諸階層が織りなす近江の地域社会において、六角氏はどのようにしてその権力を維持できたのか。六角氏と地域社会をつなぐ人々の動きに着目し、城郭論や寺院論の成果も取り入れ、六角氏権力の歴史的な位置づけを問う。

植松清編著

大坂蔵屋敷の建築史的研究

蔵屋敷の変遷、建築構成・空間構成、居住性などを研究

本体 四、八〇〇円

石井伸夫・仁木宏編

守護所・戦国城下町の構造と社会

―阿波国勝瑞―

中世都市史研究を大きく前進させる一書

本体 六、六〇〇円

村井祐樹著

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

可能な限り一次史料を用い、基礎的事実を明らかにする

本体 二、六〇〇円

佐々木倫朗著

戦国期権力佐竹氏の研究〔オンデマンド版〕

東国に存在した政治権力の特徴を明らかにする

本体 六、一〇〇円

高木博志（京都大学教授）編

近代天皇制と社会

10月刊行

A5判上製・五五二頁／本体七、三〇〇円

天皇が国家の頂点に立った近代、天皇制は人びとにどのように受け入れられていったのか。

社会における受容のありよう、権威を高めていった顕彰という行為の具体的検証を通して、天皇不在の社会へ天皇制が浸透していく過程を描き出す。

明治維新から戦後まで、現代の象徴天皇制へとつながる近代天皇制を、「社会」をキーワードに検討する意欲作。

小股憲明著

明治期における不敬事件の研究

228事例と13参考事例を整理・検討し、明治国家の特質を考察

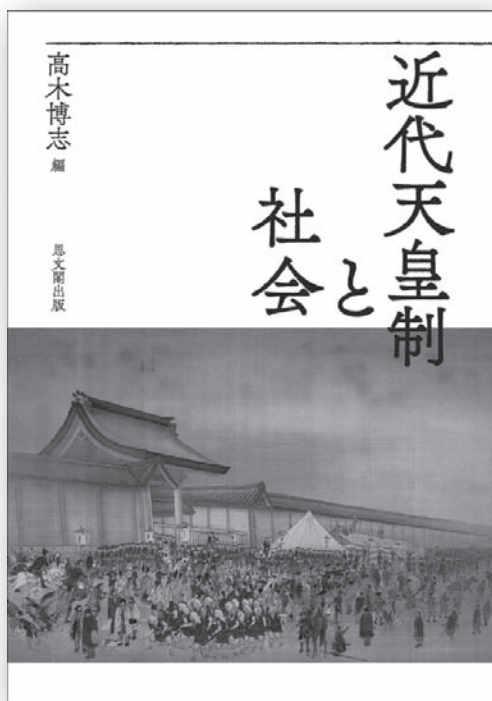
本体 一三、〇〇〇円

富永望著

象徴天皇制の形成と定着

新憲法運用の積み重ねにより形成されたことを実証する気鋭の書

本体 四、八〇〇円



長谷川精一著

森有礼における国民的主体の創出

外国語の史料や文献も利用し、森有礼の言説や政策目的を検討

本体 九、〇〇〇円

真辺将之著

西村茂樹研究——明治啓蒙思想と国民道徳論——

西村茂樹の時代状況に応じた問題意識の変遷と主張の展開を明示

本体 七、八〇〇円

松田利彦（国際日本文化研究センター教授）編

植民地 帝国日本における 知と権力

3月刊行

A5判・九八〇頁／本体 一五、〇〇〇円

日本の台湾・朝鮮・満洲国などに対する支配において、学問的知識・政策構想・イデオロギー・スローガンなど多様な形をとって現れた「知」に着目しつつ、「知」が帝国の支配に果たした役割や、植民地支配のなかでの被支配者の「知」のあり方を考察しようとする試み。



目次

I 研究の現状

「知と権力」からみた植民地帝国
『台湾島史観』から植民地の知を再考する

II 植民地化と知の再編

法学者・岡松参太郎の台湾経緯と知の射程
領台初期の原住民調査
俳文学・知識・植民地統治の交錯
日本統治期における台湾人家族法と植民地統合問題
「帝国」としての民法学へ

III 植民地官僚の知と植民地在留日本人の知

高等農林学校と植民地の知
農村振興運動と八尋生男の政策思想
日本統治期台湾総督府における技術官僚の出自と活動分析
雑誌『朝鮮仏教』誌上に見る日朝仏教の葛藤
女性植民者と帝国の「知」

IV 帝国の知と欧米世界の知

植民地官僚の統治認識
志賀潔とロックフェラー財団
日本植民地医学から東アジア国際保健機構へ
戦前期における法学者・鶴岡信成の法学研究についての「試論」

V 被支配民族の知

朝鮮の開化派官僚・尹雄烈が描いた近代と日本
忘れられた独立運動家・李達
植民地台湾からの「留学生」郭明昆
台湾における近代性と民族性の葛藤

VI 脱植民地化／脱帝国化と知の再編

戦後朝鮮統治関係者による朝鮮統治史編纂
満洲医科大学における医学博士学位授与について
日本の帝国大学における朝鮮人留学生の状況と帝国知識の連続
白麟済の近代認識と自由主義
崔虎鎮の韓国経済史研究と東洋社会論
普成専門学校から金日成綜合大学へ

土井浩嗣（熊本学園大学准教授）著

植民地朝鮮の勸農政策

8月刊行

A5判上製・四四八頁／本体九、〇〇〇円



日本から始まった勸農政策は、どのように朝鮮に移植され独自の発展を遂げたのか。日露戦争から世界恐慌までの時期を対象とし、保護国期・植民地期における朝鮮の勸農政策の形成・展開過程を説明することによって、近年議論が硬直化しがちな朝鮮植民地農政の再検討を試みる。

中川理（京都工芸繊維大学教授）編

近代日本の空間編成史

A5判上製・五四八頁／本体七、八〇〇円



わが国戦前の空間はどのように編成されてきたのか……。日本の近代化過程という歴史全体のなかで議論することを掲げ、インフラストラクチャーと制度や政治、あるいは共同体などとの関わりを考究。建築史、都市計画史、土木史、造園史、歴史学など歴史的研究に携わる一線の研究者が、広くわが国の空間変容の実相を描き出す。

河本信雄（佛教大学特別研究員）著

田中久重と技術の継承

―時計からからくり人形、そして電信機―

2月刊行

A5判上製・二八六頁／本体七、六〇〇円



職人としてからくり人形や万年時計と手掛け、技術者・起業家として実用電信機の製造を果たした田中久重（1799-1881）。彼の生涯を通して、日本各地の時計職人の技術が引き継がれ、からくり人形等に伝播し、電信機に代表される産業技術の近代化から今日のIT技術につながる「技術の継承」の実像に迫る。

一般社団法人和食文化国民会議 監修

和食文化ブックレット「全10巻」

A5判並製・九六頁／（各）本体 九〇〇円



和食とは何か。郷土料理も含めた広義の和食文化を視野に食育、地産地消、年中行事などとも絡めながら、和食文化の保護・継承、そしてその価値の再発見に取り組んだブックレットシリーズ全10巻。

【構成】

- ① 和食とは何か
- ② 年中行事としきたり
- ③ おもてなしとマナー
- ④ 和食と健康
- ⑤ 和食の歴史
- ⑥ 食材と調理
- ⑦ うま味の秘密
- ⑧ ふるさとの食べもの
- ⑨ 和菓子と日本茶
- ⑩ 和食と日本酒

一般社団法人和食文化国民会議 監修

和食手帖

新書判並製・九二頁／本体 一、五〇〇円



和食の定義や歴史、食事マナーや調理方法、食材の特徴や資料など、教養から実践のための知識まで幅広く収めた一冊。

【内容】和食とはなにか／日常の和食／和食の食材／加工食品／各地の食／食に関する資料

熊倉功夫編

日本の食の近未来

「食の豊かさ」は今後何をもたらすか。食文化の近未来について考察

本体 二、三〇〇円

橋爪伸子著

地域名菓の誕生「オンデマンド版」

近世の名産から近代の名菓へ、その成立の背景について論じる

本体 九、七〇〇円

尼崎博正（京都造形芸術大学教授）

麓和善（名古屋工業大学教授）

矢ヶ崎善太郎（京都工芸繊維大学教授 編）

庭と建築の煎茶文化

—近代数寄空間をよみてく—

1月刊行

A5判上製・三五〇頁／本体五、五〇〇円

桐浴邦夫（京都建築専門学校副校長） 著

茶の湯空間の近代

—世界を見据えた和風建築—

A5判上製・二八〇頁／本体五、八〇〇円

小野芳朗（京都工芸繊維大学教授）

本康宏史（金沢星稜大学教授）

三宅拓也（京都工芸繊維大学助教） 著

大名庭園の近代

A5判上製・四七二頁／本体八、〇〇〇円



煎茶の流行、茶の湯（抹茶）の復興——、近代茶道界はまさに煎茶・抹茶がせめぎ合い、融合する時代であった。

庭・建築に取り入れられた煎茶的な趣向は、茶の湯の世界と融合し、新たな近代数寄空間を形成していった。これまで茶の湯の視座からのみ語られてきた近代数寄空間を煎茶的要素に注目して新たに読み解く。



高度な技術と類まれな空間構成と意匠をもつ数寄屋建築は、近代において世界から高い注目を集めるようになった。

本書は、近代数寄屋建築の数少ない専門家である著者が、茶の湯の系譜を考慮しつつ、「茶の湯空間」が近代においてどのように理解されてきたのかを読み解く試み。

大名庭園が語られるとき、お殿様がいた近世に注目が集まるのに対し、近代はまったく忘れられてきたのではないか？しかし、明治・大正・昭和という激動の時代をくぐりぬけるあいだに、大きな変容をとげている。

大名庭園のいまを知るために決して見落とすことができない近代の歴史を掘り起こす。

バクシンジョン
朴珉廷（国際伝統藝術研究会幹事） 著

そそりの哲学

—数寄茶湯の原点—

3月刊行

A5判上製・二七二頁／本体五、〇〇〇円

「上をそそりに、下を律儀に」

山上宗二が残した茶書『山上宗二記』において、茶人の在り様をはじめ、もてなし・茶室・懐石・灰形・取り合わせの在り様に至るまで提唱されていた「そそり（眞相）」こそ、数寄茶湯の原点であり、哲学である。

藝道における修行論の研究を通して、「守破離」の「離」の境地、そこから生まれる「自然体」の姿としての「そそり」を見いだす。

熊倉功夫（国立民族学博物館名誉教授） 著

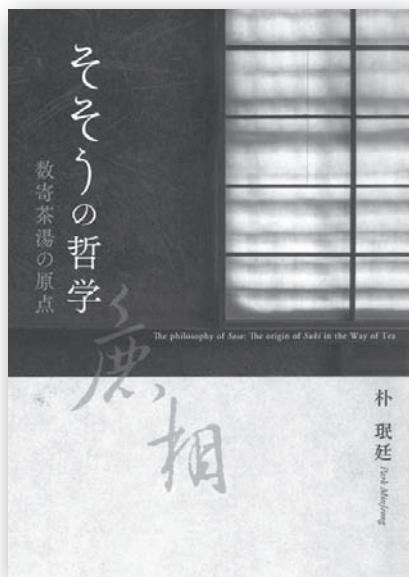
熊倉功夫著作集〔全7巻〕

11月刊行

A5判上製・平均五〇〇頁／（各）本体七、〇〇〇円



- 第一章 藝道における修行の段階論
- 第二章 『山上宗二記』における修行論
- 第三章 数寄茶湯の風体「そそり」
- 第四章 「守破離」



伝統とは、美とは、日本とは——。
文化史の諸領域にわたり茶の湯を軸として、
鋭敏な感覚で鮮やかに本質を明らかにした著
者の自選によってまとめる全7巻。
【構成】①茶の湯—心とかたち—／②茶の湯
と茶人の歴史／③近代茶道史の研究／④近代
数寄者の茶の湯／⑤寛永文化の研究／⑥民芸
と近代／⑦日本料理文化史

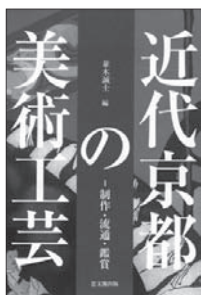
並木誠士（京都工芸繊維大学教授・同大学美術工芸資料館長）編

近代京都の美術工芸

―制作・流通・鑑賞―

3月刊行

A5判上製・六〇八頁／本体 二、〇〇〇円



明治・大正期の京都で制作・流通・鑑賞された絵画、工芸、建築、庭園、定期刊行物や書物など広範なジャンルをとりあげて論じることにより、近代京都の美術工芸をめぐる状況の解明を試みる。また、パトロンや学者たちなど、美術史の文脈にこれまでほとんど登場しなかった人びとが、美術工芸家をめぐるネットワークとして浮かび上がる。近代京都の美術工芸研究を更新し、その作品や資料の評価、位置づけを問い直す論集。

並木誠士

青木美保子（京都女子大学准教授）編

京都近代美術工芸のネットワーク

A5判並製・三五一頁／本体 二、五〇〇円



人を中心とした、近代京都の美術工芸にまつわるヒト・モノ・コトのネットワークの軌跡を辿る。ビッグネームだけでは構築されない美術工芸の現場をあぶり出すことにより、よりヴィヴィッドな美術史が見えてくる。

藤田治彦責任編集

アーツ・アンド・クラフツと日本

デザイン・工芸・美術・社会・産業・生活など立体的な関係と考察

本体 二、九〇〇円

藤田治彦責任編集

近代工芸運動とデザイン史

各国における芸術分野での歴史・重要な動向を解き明かす

本体 二、九〇〇円

ダーティントン・ホール・トラスト、ピーター・コックス編

ダーティントン国際工芸家会議報告書

―陶芸と染織・1952年―

本文篇で翻訳を、資料篇で原典および関連資料を掲載

本体 八、五〇〇円

ジャポニスム学会編

ジャポニスム入門

絵画・工芸以外の分野も射程に入れ、ジャポニスムの全体像に迫る

本体 二、八〇〇円

伊勢物語研究会編

住吉如慶筆 伊勢物語絵巻

4月刊行

A 4判上製・三三八頁／本体二七、六〇〇円

近世における伊勢物語絵の最高水準を示す作品とされる「住吉如慶筆 伊勢物語絵巻」（東京国立博物館蔵）。絵巻全体の構成や場面解説および最新研究成果を提示する。

絵画史、国文学のみならず歴史学や住宅建築史、さらに文化史や服飾史などの幅広い視点から、如慶が描く伊勢物語絵の魅力に迫る。

神戸女子大学古典芸能研究センター編

神戸女子大学

古典芸能研究センター研究資料集2

絵入謡本と能狂言絵

11月刊行

B 5判並製・四八頁／本体四、二〇〇円



神戸女子大学古典芸能研究センターおよび同大学図書館が所蔵する『絵入謡本』『能狂言画帖』『能狂言絵巻』『能狂言図巻』の絵画部分をオールカラーで掲載。さらに解題と詞章の翻刻を付す。いずれも能・狂言の内容を絵画化した興味深い作品で、とりわけ『絵入謡本』は加賀前田家旧蔵という確かな伝来を持つ豪華版。



小山聡子（二松学舎大学教授）
松本健太郎（二松学舎大学准教授） 編

二松学舎大学学術叢書

幽霊の歴史文化学

2月刊行

四六判上製・三四四頁／本体二、五〇〇円

本来目に見えない幽霊を人びとはどう感知し、それを表象するためにいかなる工夫をしてきたのか、幽霊になにを求めたのか。歴史学、メディア学、文学、美術史学、宗教学、社会学、民俗学等さまざまな研究分野から日本人の精神世界の一端に迫る。

三浦俊介（立命館大学非常勤講師） 著

神話文学の展開

— 貴船神話研究序説 —

5月刊行予定

A5判上製・四六八頁／本体二、〇〇〇円



第一部 幽霊の存在論—それはどう生起するのか
第二部 幽霊の表現論—それはどう描かれるのか
第三部 幽霊の空間論—それはどこに出没するのか



古代日本の「記紀神話」、神社内で作成され管理されてきた「神社神話」、中世日本の各種資料に見える神話の異伝、毘沙門天が登場する「仏教神話」、そして中世神話「貴船の本地」などを多角的に論じる。神話をとおして日本文学をより豊かに読みとくうえで、必読の一書。

思文閣グループの
逸品紹介

美の 縁



丹緑本

義経記

八冊

『義経記』は、源義経の生涯とその主従を中心に描いた軍記物語。別名『判官物語』。能や歌舞伎・浄瑠璃など、後世の多くの文学作品に影響を与えた作品として知られている。

また丹緑本は、寛永から万治（二六二四〜六一）にかけて行われた、墨刷りの挿絵に特色のある筆彩を施した版本という。彩色は丹・緑青・黄の三色が用いられ、丹と緑が多用されていることから、近代になって丹緑本と呼ばれるようになった（古くは「ゑどり本」。出版の中心が京・大坂にあった時期に製作されたため、伝本は上方版に限られる）。

本書は寛永十二年版『義経記』の丹緑本。栗皮色の表紙を付し、題簽や打ち付け書きはみられない。挿絵は全冊計六十五図にも及び、いずれも色合いが良く、古拙で素朴な趣深いものとなっている。浸み跡と浸みによる一部破損、挿絵緑青部分の傷みなどもみられるが、本書のごとく八冊にも及ぶ丹緑本は極めて稀である。

本書は、その稀観性は言うに及ばず、彩色によって視覚効果を高め、のちの多色刷版本の誕生を促した丹緑本として、出版史上、画期的な本といえよう。



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 531-0001 FAX (075) 531-5533
<https://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



御即位大嘗祭絵巻 一巻

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております
(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い
合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣 査定申込みアプリ

お手持ちのスマートフォン・タブレットで簡単に査定申込みができる。
「お宝鑑定! 思文閣・美術品査定申込」アプリをリニューアルいたしました。



○画面をシンプルに見やすく改定いたしました。
○撮影がイデの写真を追加使用いたしました。
○写真がiPhone・iPad両方で利用できる
ようになりました。
※iPad版をお使いの方は、iOS版の新規ダウン
ロードをお願いします。



「思文閣」で検索、無料ダウンロード

SHIBUNKAKU
思文閣



ぎやらい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎやらい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386
TEL (075) 761-0001 galler@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/